
黄昏ベルベット

天川ミニー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黄昏ベルベット

【Nコード】

N0396Y

【作者名】

天川ミニー

【あらすじ】

診断メーカーで出たタイトルを使い、書いたお話です。

教師と生徒の、黄昏の時間。

頑張っているセンセイと生徒、両方に向けてのメール？（笑）

(前書き)

思いつくままに2時間程度でさっくり書いたお話です。つつこみどころ満載かもしれませんが、気楽に読んでやってください。^^

オレンジ色の夕日が、教室の中を照らしている。

放課後、主のいない机と椅子が整然と並び、まるで作り物の空間みたいだ。

それでも消えないかすかな残り香は、つんと青臭い高校生活の匂い。現役で満喫している彼らには決してわからないこの郷愁。そして――胸に疼く小さな傷跡。

「あーあ。ぐちゃぐちゃにゴミとか入れちゃって」

くすつと笑い、わざと呟いてみる。そうすることで、現実を思い出すからだ。

今、自分はもうあの頃の制服姿じゃない。あの時みたいに、ドキドキする想いも抱えていない。

抱えていたほうがよかった――なんて思ってしまうのは、ただひたすら、現実が乾ききっているからなのかもしれない。

気づけばもう二十代も後半に足をつっこんで、下手すりゃ十は年下の人間相手に日々弁舌をふるっている日々。それが紛れもない自分の夢で、叶えられたことは誇っているのだろう。

なのに、手にしてしまえばただ当然の時間になって、単なる日常の連続に変わる。教卓の向こう、決して届かないひとに焦がれて泣いて、その想いを夢という形にすり替えて、教師を目指した。

(今頃、どうしているかな)

忘れた過去、葬った恋心。だから、別に辛くなんてない。

ただ、こんな黄昏に包まれる一時だけ、思い出してしまっただけ――。

一番後ろの窓際、やや素行に問題ありの生徒が座る机の中味を掻き出して、明らかなゴミを捨てる。

そんな作業を済ませると、教室全体を見回して鍵をかけた。

いつもの見回り、いつものルーティン。

それが崩れたのは、三年生の教室を覗いた時だった。

「あら」

思わず、声が漏れた。今度は無意識のものだ。

みんな帰った後だと信じきっていたのに、まだ生徒が残っていた。テスト前だから部活動もない。それなのにどうしてか、わからない。ただ、一人少年が眠っていたのだ。

顔を見た瞬間、名前も授業態度も思い出した。船橋玲、なんていう中性的な名前同様、整った顔立ちに薄茶色の髪が印象的な生徒だった。かといって染めているのではなく、天然なのだという。彼のおじいさんだかがクォーターで、玲にもその影響が出たらしかった。容姿と共に明るい性格で、女生徒はもちろん男子生徒にも人気がある。それでいて頭もよく、質問など目的を付いたものをする優等生——そんな彼が一人で残っているなんて。

「えっと……船橋くん？」

ためらいつつ、呼びかけてみる。が、机に突っ伏し、端正な寝顔が無防備にさらしている玲が起きる様子はない。

「起きなさい。もう鍵閉めちゃうわよ」

できるだけ事務的に聞こえるよう、それでいて冷たく響かないよう、気をつけながらも一度。ついでに、そっと肩のところに手をかけて、軽くゆすってみる。

（まだ起きないなんて、もしかしてわざとやってる？）

そんな疑いがむくりと芽を出す、目の前の寝顔はとても静かで、まぶた一つ動きはしない。規則的な寝息もたてていて、わずかに開いた唇などは演技と思えない自然さだった。

「熟睡してるのかな……」

ため息をついて、どうやって起こそうか再考する。自分も早く帰って教案をまとめたいし、色々やることだってある。疲れがたまった金曜日だ。ぬるめのお風呂に文庫本を持ち込んで、半身浴。それからとれかけのペディキュアも塗りなおしたい。そういえば、見たテレビもあった。

やるべきことは順序だてて思いつくし、無理やりにも起こすのが当然の選択肢だろう。それなのに、なぜかすぐにそうする気になれなかった。

長い昼間が終わって、夜の闇とバトンタッチするこの夕方。一日の中で、一番優しく、一番妖しい明かりに照らされるわずかな時間。昔から、私が特に好きな時間帯だ。

（そういえば、あの時も――）

ふと胸に蘇るのは、懐かしく、ほろ苦い思い出。初めて本気で男の人を好きになった――と、少なくとも当時は信じていた――高校の二年間。他の学校から転勤してきたひとまわりも年上の彼の記憶。家庭の問題でふてくされていた私を何かと気にかけて、励ましてくれた。女の子の輪に入れなくて、一人屋上にいた昼休み、隠れてタバコを吸いに出てきたのを見つけて。ばつが悪そうに苦笑しながら、それでも色々話し相手になってくれた。あのひとの横顔が、笑顔が、まなざしが――突然鮮やかに蘇る。

あれは卒業間際、ついに想いを告白しようとした日だった。恋の終わりは、唐突に訪れた。

結婚。遅めの春を照れくさそうに報告してきたあのひとは、私の想いになんて微塵も気づいていなかった。だからこそ、言えなかった。言ってはいけないのだ、と悟った。

それなのに抑え付けた恋心は勝手に暴走して、思わぬ行動を自身に取らせたのだ。

一人、教室に残っていた私は、ちょうどあのひとが戻ってくるのを知った。教卓に忘れ物があったとか、確かそんな理由だったと思う。それで、急いで自分の机に突っ伏して、眠ったふりをした。すぐに見つけてくれたあのひとが声をかけても、揺すっても、寝ている演技を続けた。

ふっとため息をついた後、かなり長い時間が経過したような気がしたけれど――実際は数秒だったかもしれない。とにかく、困ったような苦笑の気配があって、そっと頭が撫でられたのだ。

あの頃の自分には、それだけでものすごい奇跡だった。想いを告げて、応えてもらうことはできなくても、こうして触れられただけでいい。この優しい、一瞬の感覚だけを大切に大切に、宝物みたいに胸の奥におさめて、忘れようと決意した。あふれそうになった涙を必死でこらえて、できる限り自然を装って起き上がり、挨拶をし、教室の扉を開けた。あの、切なくて苦しい、それなのに幸せな記憶のページ。それが今、人物を変えて再現されたような気がしたのだった。

（何を考えてるの、私ったら）

いい年をして、妙な感傷にひたっていたせいかもしれない。だから、あわてて頭を振って、玲の髪に伸ばしかけていた手を空中で握り締めた。夕日に彩られ、やわらかく輝く髪——それに触れようとしていた自分が信じられなかった。

「……っ！」

あまりのことに声が出なかった。引っ込めようとしたその手を、いや、正確に言うとお首を——今の今まで眠っていると疑わなかった玲によって掴まれたのだ。

「なんだ、つまんないの」

年齢にしては低く、どこか色気さえ感じさせる声がそう言った。

「な……っ、お、起きてたのね？ それなら早く——」

動揺を悟られたくなくて、教師の顔を素早く作る。こんな悪戯程度には、全く驚きもしないんだと。

それなのに正直な心臓は、いつもより倍増して脈打っていた。

「頭ぐらいい撫でてくれんのかなーと思ったのに、先生意外と奥手なんだ」

「はあ？」

「いいじゃん、そんな緊張しなくてもさ。別に取って食おうってわけじゃないし。それに今時、教師と生徒がどうか、固いこと誰も気にしないって」

「何言ってるの……？」

不審な思いに、掴まれたままの手首を引こうとする。それなのに玲は離そうとせず、そのままガタリと音を立てて椅子から立ち上がった。百八十はある長身だから、いくら教え子といっても警戒してしまった。

「ねえ先生、イイコトしようよ」

美しい顔、美しい唇。その朱が、夕焼けの光に映えている。ゆっくりと唇を舐めて、微笑む。あくまでも気安く、まるで世間話の続きのように玲は言った。

「な、何を——離して……離しなさい！」

精一杯教師の威厳を込めたつもりの声は、鼻で笑われただけ。掴んだ手首を引き寄せ、玲が耳元に囁く。

「俺、ずっと前から先生が好きだった。その銀縁のメガネも、ぱりと清潔な白いブラウスも、いつも地味なスーツも——全部クールで、真面目を装ってるけど、本当はそうじゃない。先生と俺は似てる。どこか、満たされてない。だから毎日、面白くなさそうな顔で授業してる。そうだろう？」

俺たち、似た者同士なんだよ——くすくす笑いながら、それでいて冷め切った表情で言われて、ドキリとした。目の前のオトコがまだ高校生の子供で、教え子で、なんて事情を忘れて、思いきり突き飛ばした。

「認めないんだ。でもさ、俺にはわかるよ。教師やってるけど、本当は生徒のことなんて一ミリも興味持ってないんだろ？ 真面目な顔して授業してるその頭で、週末何しよう、とか考えてる。そんな先生だから俺は好きなんだ。一人の女として、同志として」

「ばっ、馬鹿なこと言わないで」

はねつけたつもりなのに、言葉は弱く、か細く床に落ちていく。勝ち誇ったような笑みを浮かべた玲に、本当は何もかも見透かされているのだとわかっていたから。

「いいじゃん。誰もいないんだから、キスぐらい。いや、何ならそれ以上だってさ——」

悪魔のような囁きが、すぐそばで聞こえる。自分のまっすぐな髪を――後ろで束ねたそれを片手で取り、ゆっくりと撫でられる。抵抗できない私に調子付いたのか、その手が頭にも回った。まるで立場が逆になったかのように、優しく撫でられてやっとな、私は我に返った。

「違う……」

小さく、口の中にこもった声を、玲は聞き取れなかったらしい。そのまま後頭部を片手で支え、引き寄せようとするのを、思いきりふりはらうことで拒絶した。

「何すんだよ!」

完全に勝ちだと思っていたのか。玲は頬をかすかに染めて、瞳にも屈辱の色を明らかに浮かべている。

睨み付けられているのに、なぜだか腹は立たなかった。

そのまま一筋、零れ落ちた私の涙に、さすがに戸惑ったのだろう。唇を噛む玲を見上げ、私は静かに首を横に振る。

「違う。ううん、私のことはいいい。だって本当に当たってるから――未熟で、全然『らしく』ない教師。それなのに情性で毎日こなしてる。いけないよね……でも、あなたは違うわ、船橋くん」

「――はあ?」

先ほど自分が口にした言葉を、今度は玲が眉を寄せて言った。そつと一歩、そして二歩近づいて――少し背伸びした私は、一瞬のためらいを打ち消して彼の頭を撫でた。色素の薄い玲の両目が、純粋な驚愕に見開かれる。微笑みが、自然と沸きあがった。

「こんな、十も年上のセンセイなんかとイイコトして満足するような――そんな風に自分をいじめて喜んでいいひとじゃない。あなたはまだ高校生で、その前には……無限の道が広がってる。だからあきらめないで。自分自身を、切り捨てないで」

「……何、くっせー台詞。急に教師ぶってさ、バカじゃねえ?」

「そうだね。自分でも馬鹿みたい。本当は、もっと前からこうしてなきゃいけなかったのにね」

ふふっと笑って、自分で気づいた。こんな風に笑うのも、久しぶりだということに。

どうして教師になりたいと思ったのか。なぜ、あの頃の自分と同じ高校で働こうと思ったのか。

胸の奥にしまいこんだ想いと一緒に、忘れてしまっていたのだ。

「理想の教師なんてさ、きっといないんだよ」

自嘲の笑みでそう言うのと、ますます不可解そうな顔をする玲。やっつと、年相応の表情になった。

（それでもそうなるうとして、あがくことが大事なんだ。必死で、追いつこうとすることが……）

もしかして、あのひともそうだったのだろうか。

ずっとずっと遥か上にいた存在が、不思議なほど近く思い起こせた。

玲の瞳にあの頃の自分と同じ想いが宿るのか、そうでないのか——そんなことはわからない。恋心なんて、自分自身にもわからないのだ。傍から見て読み取れるほどあまいものじゃないはずで。

あのひとが気づいていたのか、そうでないのか——だからきつと、それも大したことじゃない。

ただ、わかったのだから。あの日、黄昏の中で頭を撫でてくれた手は、本気で自分を慈しむものだった。優しく、励ましてくれるものだった。それだけで、むくわれたこと。真実なんて、一つしかない。

「あのね、船橋くん」

「……何だよ」

単なる悪戯か、ストレス解消のお遊びか、それとも本当の誘いか。わからないけれど、拒絶され、しかも説教らしき展開にまでなったことにふてくされたような顔。その薄茶色の髪の毛、ベルベットみたいな感触を掌で蘇らせながら、私は微笑んだ。精一杯優しく、教師の顔をして。

「こんな出来損ない教師でよければ、何でも相談に乗るから」

いつでも言ってよね、と言い残して、背を向ける。

振り向かず、手を振る私に、玲は何も答えなかった。

体だけ成長したオトコノコの、戸惑ったような、それでいてほっとしたような――最後の表情が、あのひとのものと重なる。ずっと抱いていた、くすぶった記憶が、夕焼けに混ざり、溶けていく。

優しい優しい黄昏。全てを包み込んで、明日へと導いてくれる夕日が、私の頭を撫でてくれた気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0396y/>

黄昏ベルベット

2011年10月30日01時17分発行